

東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵《袋一平コレクション》より

無声時代ソビエト映画ポスター展

会期:平成21年7月3日(金)~8月23日(日)

1917年のロシア革命によって成立したソビエト連邦では、新しい社会体制を背景に、様々な革新的芸術表現の試みがなされました。中でも、映画という新世代の表現形式を大胆に改革し、エイゼンシュテイン、プドフキン、ドヴジェンコ、ヴェルトフをはじめとする先鋭的な映画芸術家を輩出して世界に衝撃を与えたことは、よく知られています。同じ時期、グラフィック・アートの分野でも若手芸術家が活動を開始し、とりわけ1920年代に盛んになった構成主義の思潮は、



グリーゴリー・ボリソフ / ビョートル・ジュコフ
《生ける屍》(1929年、フョードル・オツェップ監督)
東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵
《袋一平コレクション》より

新たな社会の建設を目指す国家の志向と相まって、大きな影響力を持ちました。本展でとりあげる「映画ポスター」は、ソビエトの前衛芸術運動推進の機動力となったこれら2つの分野の結節点ともいえる媒体であり、ステンベルク兄弟を筆頭に多くの優れたポスター・デザイナーの活躍の場となりました。

東京国立近代美術館フィルムセンターは、映画フィルムとならんで、スチル写真・シナリオ・関連文献などの映画関連資料の収集・保存事業に取り組んでおり、現在4万5千点を超える映画ポスターを所蔵しています。中でも最も貴重なコレクションのひとつが、無声映画時代後期のソビエトで製作され、ロシア・ソビエト文化研究家・翻訳家の袋一平(1897-1971)によって日本にもたらされた約140点にも及ぶソビエト映画のポスターです。



ステンベルク兄弟《カメラを持った男》
(1929年、ジガ・ヴェルトフ)
東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵
《袋一平コレクション》より

本展では、その貴重なコレクションから51点を精選して紹介します。また本展会期中、三回にわたりポスター展示作品の映画上映会を開催します。その中の一作品「新バビロン」には、20世紀ソビエトを代表する作曲家ショスタコーヴィチがオーケストラによる映画音楽を作曲しており、今回はそれを編曲したピアノ伴奏付きで上映します。本展が、映画とデザインという新興芸術分野が

協力することで生みだされたこれら一群の鮮烈なポスターを通して、20世紀の芸術運動における革新的息吹

を感じ取る機会となれば幸いです。

関連イベント

●ソビエト無声映画上映会(解説・ピアノ伴奏付)

2009年7月30日(木)・7月31日(金)・8月1日(土)
京都国立近代美術館 1F ロビー
料金 500円(当日券のみ)、先着200名

●講演会「ロシア・アヴァンギャルドの映画ポスターとその周辺」

2009年8月1日(土) 午後2時~3時30分

京都国立近代美術館 1F 講演室

聴講無料、先着100名

講師: 杉山昌夫(神奈川県立近代美術館主任学芸員)

生誕120年

野島康三展

ある写真家が見た日本近代

会期:2009年7月28日(火)~8月23日(日)

野島康三(熙正1889-1964)は、大正期の絵画主義写真から昭和初期の新興写真の時代にかけて活躍した、わが国の近代写真の誕生と展開において最も重要な写真家の一人です。



《仏手柑》1930年 フロムオイル・プリント 当館蔵

絵画主義の影響を色濃く残す「芸術写真」の隆盛期に写真を始めた野島は、当時主流であったピグメント印画技法を用いて卓抜な技術と繊細な感覚に裏付けられた濃密で重厚な写真作品を制作しました。その後ドイツ新興写真に触発された野島は、1930年代に大胆なトリミングを駆使したゼラチン・シルバー・プリントへとその作風を大きく変化させ、写真独自の表現を追求していきます。特に写真家の中山岩太(1895-1949)と木村伊兵衛(1901-1974)とともに創刊した写真雑誌『光画』(1932-33)は、出版資金の大部分を野島が負担し、海外の主要な写真論を紹介するとともに若い世代の写真家たちに発表の場を提供し、その後の新興写真の展開において極めて重要な役割を果たしました。

その一方で野島は、私財を投じて東京神田神保町に開設した画廊「兜屋畫堂」(1919-20)や自邸のサロンで梅原龍三郎や岸田劉生など『白樺』派を中心とする気鋭の美術家たちの展覧会を開き、その活動を経済的・精神的に支援しました。同時代の美術の擁護者として野島は、画廊経営だけでなく、美術雑誌や作品集に収載するための美術作品の撮影の仕事にも携わっています。今回の展覧会では、野島の代表的な写真作品とともに、夭折した彫刻家・中原悌二郎(1888-1921)の遺作集(『中原悌二郎作品集』、1921)と、陶芸家・富本憲吉(1886-1963)が1920年代に精力的にその制作に取り組んだ図案集(『富本憲吉模様集』、1923-27)における野島の仕事に着目し、その業績をとらえ直すことを試みます。

生誕120年を記念して開催する本展では、野島康三遺作保存会の寄贈による当館所蔵の野島作品を中心に、中原と富本の作品集制作に関連する作品・資料を加えた約200点により、野島の作品世界と美術擁護者としての彼の活動を紹介します。野島康三という一人の写真家の眼差しの変遷を追うことは、1920年代から30年代の日本人の「近代の視覚」の生成過程を検証することでもありません。

関連イベント

●講演会1「『富本憲吉模様集』について」

2009年8月8日(土) 午後2時~3時30分

(当日午前11時から整理券配布)

京都国立近代美術館 1F 講演室

聴講無料、先着100名

講師: 土田真紀(美術史家)

●講演会 2「野島康三と『光画』」

2009年8月22日(土) 午後2時~3時30分

(当日午前11時から整理券配布)

京都国立近代美術館 1F 講演室

聴講無料、先着100名

講師：金子隆一(東京都写真美術館専門調査員)

●作品解説

2009年8月6日(木) 午後2時~3時

(当日午前11時から整理券配布)

京都国立近代美術館 1F 講演室

聴講無料、先着100名

講師：林直(当館客員研究員)

●京都造形芸術大学 一般公開講座 募集講座/芸術と文化のワークショップ

プロムオイルプリント~ビクトリアリズム(絵画主義写真)体験講座~

2009年8月21日(金)~8月23日(日) 全3回

京都国立近代美術館・京都造形芸術大学

受講料10,000円(全3回分 印画紙・薬品代含む)、先着30名

主催：京都造形芸術大学、京都国立近代美術館

お問い合わせ・お申込先：京都造形芸術大学 瓜生山エクステンションセンター TEL (075)791-9124 <http://www.kyoto-art.ac.jp/general/>

ウィリアム・ケントリッジー歩きながら歴史を考える そしてドローイングは動き始めた...

会期：2009年9月4日(金)~10月18日(日)

ウィリアム・ケントリッジ(1955、南アフリカ生)は1980年代末から、木炭とパステルで描いたドローイングを映画用35mm撮影機を用い、ドローイングの部分修正を重ねながら一コマずつ撮影、文字どおり動く素描と呼べるコマ撮りアニメーション



《Drawing for Felix in Exile (Felix's room/Nandi with telescope)》
1994年
木炭、パステル、紙 93×120cm 作家蔵 © the artist

を制作してきました。彼の作品

は南アフリカの歴史と社会状況を色濃く反映するもので、自国のアパルトヘイトの歴史を痛みと共に語る初期作品は、脱西欧中心主義を訴えるポストコロニアル批評と共鳴する美術的実践として、世界中から大きな注目を集めました。しかしその作品は単に政治的メッセージだけを伝えるのではなく、状況に抗する個人の善意と挫折、庇護と抑圧の両義性、そして分断された自我を再統合しようとする努力とその不可能性など、近代の人間が直面してきた普遍的かつ根源的問題を、執拗に検証し語り続けているのです。彼が「石器時代のアニメーション」と呼ぶ素朴な制作技法は、精緻なセル画アニメやCGが主流である現代のアニメーションにおいては対極に位置するものでありながら、その斬新で力強い表現は、素描によるコマ撮りアニメーションが現代の有力な表現手法となり得ることを証明しています。1990年代初頭からケントリッジの作品と演劇や執筆までおよぶ彼の多面的な活動は、世界中の若い世代の美術家たちに大きな影響を与え続けています。

本展では初期のソーホー・エクスタインの連作から最新作《I Am Not Me, the Horse Is Not Mine》まで、19点の映像作品と、35点の素描、64点の版画により、ウィリアム・ケントリッジの作品活動の全貌を紹介する日本で初めての展覧会となります。

関連イベント

●ウィリアム・ケントリッジ

レクチャー/パフォーマンス

「I am not me, the horse is not mine」

2009年9月4日(金)

午後7時~8時

(午後6時30分開場)

京都府会館 第二ホール

入場無料

定員約700席

英語(日本語字幕付き)

※詳細は随時追加掲載し

ます



「I Am Not Me, the Horse Is Not Mine」より(スチール画像) 2008年
フィルム・インスタレーション(レクチャー/パフォーマンスと異なる)
京都国立近代美術館蔵 © the artist

NFC所蔵作品選集

MoMAK Films @ Goethe

前号でもお伝えしましたが、東京国立近代美術館フィルムセンター(NFC)が所蔵する約6万本におよぶ内外の名作映画のコレクション、この貴重な映画の一部が京都でも鑑賞できるようになりました。2009年5月23日の第1回(ドイツ映画特集)を皮切りに、引き続き20世紀前半の各国映画の特集を年間5回の予定で上映します。

今年度の日程

第2回：2009年9月12日(土) フランス

第3回：2009年11月 ソビエト

第4回：2010年1月 中国

第5回：2010年3月 日本

※上映作品、各回のスケジュールについては当館ホームページの「プレスルーム」からご確認ください。

会場

Goethe-Institut Japan in Kyoto / ドイツ文化センター(京都)

〒606-8305 京都市左京区吉田河原町19-3(川端通荒神橋上ル) TEL (075) 761-2188

※詳細は、当館ホームページをご覧ください。 <http://www.momak.go.jp>

友の会主催 連続関連企画

京都学「前衛都市・モダニズムの京都」展

バス・ツアー開催報告 2009年6月19日(金)

大西由見子(友の会会員)

京都学「前衛都市・モダニズムの京都」展関連企画のツアーを楽しむ。①日本パプテスト病院(上野伊三郎設計)、②橋本関雪記念館、③ガーデンオリエンタル(旧竹内栖鳳アトリエ)、④祇園閣(伊東忠太設計)。異文化を経験した時代の日本人の生き方を知った。

①は和(年輪も美しい木材の寄木造)・洋(真ちゆう、鉄、ボヘミアンガラス)の素材を調和的に使い、山迫る北白川の地に融け込む白い建物である。景観配慮の建物であった。

②では時代に流されず、日本・中国の文化的伝統に生きた関雪の気骨を感じた。

③ではイタリアンランチを味わいつつ、栖鳳も見た景色を楽しんだ(空の青さに映える八坂の塔、二年坂、石畳)。

④は複雑な存在である。3つの家紋(桐・菊・梅)から時の権力者と渡り合った大雲院のしたたかさを思う。祇園閣には施主や設計者の強い個性がある。関雪が建物から池に映る大文字を楽しんだように、大倉氏もこの高みから東山の風土を味わったのであろう。

美術館では上野伊三郎の設計図、伊東忠太の平安神宮の設計図、竹内栖鳳の平安神宮・円山公園図屏風を見た。それぞれが歴史的資料でありながら、作者の美意識(上野伊三郎の静けさ、伊東忠太の進取の気風、竹内栖鳳の詩情)を示している。最後にお雇い外国人・ワグネルの陶板に感動した。表現の多様性(鋭い自然観察に基づく繊細な表現、ユーモアあふれる表現)と冴えた色彩感覚が魅力的であった。